

芳賀徹

與謝蕪村の
小さな世界



中公文庫

©1988

與謝蕪村の小さな世界

一九八八年九月一〇日初版
一九九五年四月二〇日3版

著者 芳賀 徹

発行者 嶋 中行雄

本文・カバー印刷 三晃印刷
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八一七

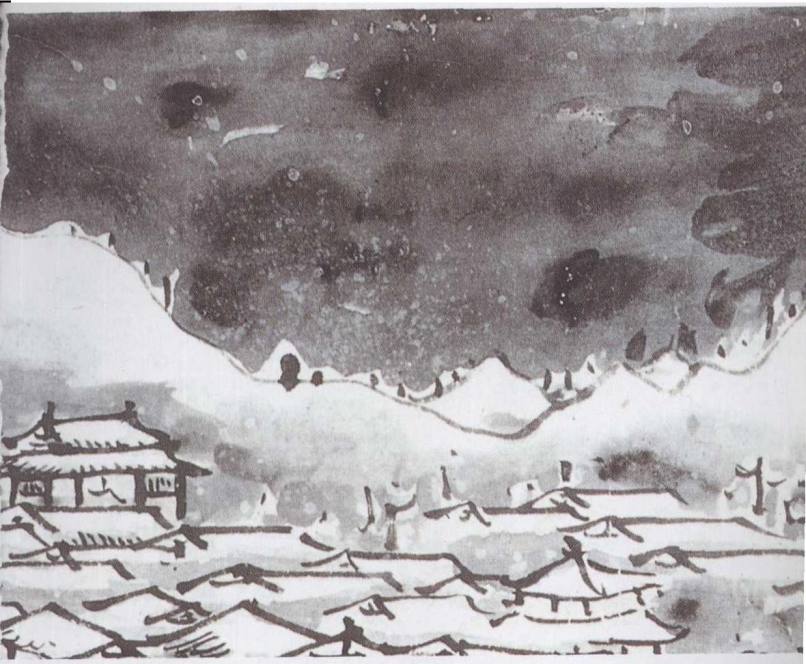
振替 001101 平云

ISBN 4-12-201548-0

Printed in Japan



與謝蕪村「宜夏」



與謝燕村『夜色樓台雪万家圖』（部分）





伊藤若冲『雪中鶺鴒図』

中公文庫

與謝蕪村の小さな世界

芳賀 徹著



中央公論社

目次

蕪村、やすらぎの空間——序にかえて

I

與謝蕪村の小さな世界

一 花やかなる小世界

二 *poète casanier*——籠り居の詩人

三 雪のなかの桃源郷

四 しどけなさの美学

II

桃源へ——「春風馬堤曲」の一解釈

蕪村詩画における桃源郷

夢を宿したテキスト

桃源図の系譜

「桃源の路次」

小径の詩画

蕪村の桃源画群

秘境の発見——

『桃源行

図』蕪村と袁中郎——『武陵桃源図』

桃源からのアイロ

ニー 桃源の人、蕪村

III

みじか夜の詩人

おもたき琵琶

「君あしたに去ぬ」——蕪村の悲歌

IV

蕪村の俳諧と若冲の絵画——十八世紀日本の文化史的情景

一 はじめに 二 秋津しま鳥瞰 三 繁縷の美の世界

四 日曜日の博物学者たち 五 日本的「ロココ」の美学

六 「寂靜ならざるの心魂」

あとがき

文庫版あとがき

主要参考文献

掲載図版一覧

引用蕪村詩画索引

與謝蕪村の小さな世界



中扉カット

蕪村『寒山晚景図』

蕪村、やすらぎの空間——序にかえて

心になにか屈したものがあつたような日、あるいはくたびれてただ呆然と燈火の前にいるような夜、與謝蕪村の句集や画集をとりだしてきてあてもなく眺めるのはいいことだ。

蕪村自身も愛読した『徒然草』に、「ひとり、燈ともしびのもとに文ふみをひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰なぐさむわざなる」(第十三段)というのは、まさにこのようなことをいうのかと思ひあたる。その「文」は、兼好の場合は主に『文選もんぜん』その他の漢籍であつたし、私たちの場合もなにも蕪村一人の詩文に限らないのはいうまでもない。だが、蕪村を相手にすごすひとときは、ことのほか「慰なぐさむわざ」であるように思われる。

その作品をたどるうちに、いつのまにか自分の呼吸までがゆるやかになっているのに気がつく。少し大袈裟にいえば、二十世紀末東京のせわしなさとそのストレスが、十八世紀末京都の人の詩画の小世界によってやわらげられ、いやされるといおうか。萩原朔太郎が昭和十一年(一九三六)、蕪村を「郷愁の詩人」と呼んで、その作品をわが身にひきつけてこまやかに論じていったとき、彼はすでにこの蕪村のもつ漢方薬のような鎮痛、鎮静の効能をわが身に即してよく知っていたのかもしれない。

たとえば、ここではほんのわずかな例だけをあげてみれば――

ゆく春や眼に逢はぬめがねうしなひぬ

うたゝ寝のさむれば春の日くれたり

燈ともせといひつゝ出るや秋のくれ

洩たれて独暮をうつ夜寒かな

底のない桶こけ歩行野分かな

冬ごもり妻にも子にもかくれん坊

雪折も聞えてくらき夜なる哉

というような句。どれも蕪村の作としてとくに有名なものではない。だが、求道者芭蕉の俳諧とはすでにまったくちがう世界がここに開けていることは一読了然であろう。長い平和のもとに少し呆けかかったような中年男が、なにか彼なりのわだかまりを抱えて、そこにいる。小市民的ともいわばいうべき、その少々くたびれた生活感情が、ここに投げだされている。芭蕉の場合とちがってこの小世界には、私たちはほとんどなんの背伸びもせず、むしろ背をまるめて入りこみ、まさに「見ぬ世の人」夜半翁をわが友とすることができ。少なくとも

も、そのような気がしてくる。

これらの句はまるで大正心境小説といったおもむきで、私たちに同病相憐れむの情をよびおこす。そしていささかの微笑とともにわが身をふりかえらせ、やがては私たちの心身の結ばれをといてくれるのである。

あるいはまた次のような句の一群がある。

いかのぼり
風のふの空のありどころ

遅き日のつもりて遠きむかしかな

春雨にぬれつゝ屋根の手毬哉

愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら

路たえて香にせまり咲いばらかな

夏河を越すうれしさよ手に草履

てなうひ
手習の顔にくれ行はたるかな

うづみ火や我かくれ家も雪の中

これらは前の一群よりも広く知られ、愛誦されている句だろう。朔太郎が発見して名づけた「郷愁の詩人」がまさにここにいる。なかでもよく知られた「愁ひつゝ」の句について、朔太郎は「青空に漂ふ雲のやうな、また何かの旅愁のやうな、遠い眺望への視野を持った、心の茫漠とした愁である」と説いたが、そのようなすでに遠くへだたって手のとどかぬものへの郷愁が、まさに「香にせまり咲く」というほどの切なさでここに洩らされている。

失われてしまった幼少の日々の緑の楽園、と同時代や後代のヨーロッパの詩人ならいいそうな或る原初の世界、桃源の里への溯行の願いが、そのノスタルジアの湧きおこる感覚的な契機ともども、これらの句にはこともなげにみごとにとらえられている。「屋根の手毬」「手に草履」また「顔にくれ行く」と、あざやかに触覚的・視覚的な映像にフォーカスをしぼってゆく。あるいは逆に「きのふの空」「つもりて遠き」「岡にのぼれば」「路たえて」と、映像をとらえどころのない無限大の時空へと向って開放する。手法はさまざまで、制作年代に多少の前後はあっても、これらが「くらき夜」に雪折れを聞いていた男、あの「底のない桶」に共感する初老の詩人の、さらにもう一つ内面の世界を伝えてくれるものであることが嬉しい。

蕪村は円山応挙の黒犬の絵に賛をして「おのが身の闇より吼て夜半はなの秋」と詠んだが、それはそのまま彼自身の、また私たち自身のすがただともいえよう。だが、その「おのが身の闇」の奥底には、なおみずみずしい夢想の世界が泉のように宿されていて得ることを、これら蕪村の郷愁の句は気づかせてくれる。これらの句に触れるとき、明治維新をはさんで二百年

というへだたりはたちまち消えて、私たちのなかにはなにか小さな流れが音たてて流れはじめるのである。

同じように、蕪村の絵の世界のなかに入ってゆくのも、まことに心たのしい。「こよなう慰むわざ」である。よく知られた『竹溪訪隠図』でも、『春光晴雨図』や『柳蔭騎路図』、あるいは愛弟子寺村百池の家に伝えられた『四季山水図』の小さな四幅対でも、眺めているうちに身のまわりに木々の香をおびてさわやかな風の吹きはじめるのが感じられる。「或時、青くて丸い山を向ふに控えた、又的礫と春に照る梅を庭に植へた、又柴門の真前を流れる小河を、垣に沿ふて緩く繞らした、家を見て——無論画絹の上に——何うか生涯に一遍で好いから斯んな所に住んで見たい」と思ったという（『思ひ出す事など』二十四）、南画好きの少年時代の夏目金之助の気持が、これらの蕪村の作品を見ているとよくわかってくる。

この漱石の語るような気分は南画の山水画一般についていえることであり、蕪村の同時代同派の画人池大雅の作品についてならばなおさら同じようにいえることなのかもしれない。だが、蕪村の山水は大雅の作品にくらべてさえ、よりいっそう濃密に日本土着の自然景観やその湿潤さを映しだしている。またそこにわずかの人物や景物をそえ、構図にわずかの工夫をほどこすことによって、画中の心理的要因を増幅し、いまの私たちにもより身近に語りかけてくるように思われる。あるいはそれが少しのちに田能村竹田によって、「大雅ハ正シクシテ譎ラズ、春星（蕪村）ハ譎リテ正シカラズ、然レドモ均シク是レ一代覇ヲ作スノ好敵手